

會



報

1952年3月

160

日本山岳會

山人の再會

日 高 信 六 郎

『ヨーロッパに来て、國をへでた友だちと、日をきめてどこかで會う約束をして、それが果たせなくても、不能條件なのだから、法律上の違約にはならないよ』と云つたのは、その頃パリに来ておられた文化人の司法官故三宅正太郎さんであつた。その通りに、私の滞歐中は、友人としめし合せて山登りや旅行をする機会に恵まれたことがなく、いつも一人で出かけたものである。

だから、今度松方君が歐洲に行かれたおりに、ロンドンとドイツにいる島田伊藤の兩岳友とグリーンデルワルドに落ち合い、その頃のガイドたちと再會して、むかしながらの山々を仰ぎながら二十五年前會遊のむかしを語り、知友のうわさに時を過ごされたというようなことは、われわれ日本人にとつてまことにめずらしい清福と、うらやまずにはおられない。

しかしガイドとの再會については、私にも小さな思出話がある。二十年あまり前、國際連盟はなやかなりし頃のこと、毎年九月に開かれる總會の折には、ゼネバで暮らしたのだが、日曜日には自動

車を引ばり出してあちこち飛びまわつた。そのうち必ず一度はシャモニーを訪ねることにしていた。むかし泊つたサヴォイ・ホテルでやすんだり、メー・ド・グラスまで汽車でのぼつたり、どうせ日歸りのことだからあまり深入りはできない。間近く山と氷河をながめて心をおどらすだけのことである。

ある時妻と友人と三人づれで、出来て間もない空中ケーブルにつかつて、エグイユ・デュ・ミディの終點まで登つて見た。そこはモンブランからつゞいて立ちならぶ尖峰の直下、海拔二千四百米を越えるところで、北にシヤモニーの谷を見おろし、西南はなだれ落ちる氷河の怒濤のさなかに、グラ・ミユレの岩峰が孤島のようになり、それを越えて仰ぐけるかなたの空際には、モンブランの頂上が輝く氷雪をいたゞき、その懸崖に見られる氷の層の厚さは驚くばかり、それから東につらなるエグイユの連峰はわれらの肩を壓してそびえ立つ。

七年まえ、まだこのケーブルが出来ないころに、こゝから見えるボッソン氷河をへだてる肋尾根（モンターニュ・ド・ラ・コート）をのほり、一日がかりでグラン・ミユレの小舎にたどりつき、その夜中すぎから八時間、雪と氷をふ

んで頂上をきわめたみち筋を指さして連れと語るうちに、陽は傾きはじめ、暗雲が谷のななから湧いて來た。歸り仕度をしていると、上の氷河をわたる蟻と見えた一隊が、岩をふんで近ずいて來るその中の一人の、鯨がかつた無精ひげと猫背に見覚えがあると氣付いた頃には、先方も氣がついて、顔をほころばせ手をのばして來る。

一九五二年度

會員總會

★四月廿六日（土）午後二時

於 万世橋 交通博物館

★議事の概要

過去一ケ年の事業概況報告
決算報告並豫算附議

★費用増額の件、役員改選の件
★他に講演の豫定もあり、多數會員の御出席を希望します。

モンブランにつれて行つた兩シモンの一人、ジュールであつた。この谷には同姓が多く、おまけに同名まで澤山あつて、住んでい

る部落の名をつけぬと區別が出来ない程である。シモン姓もその一つであるが、エルネストが五十歳あまり、立派なひげに顔を埋め、陸軍大佐といった格好、その上モンブラン登頂百回というヴェテラン。ジュールは年かさだがおとな

しい方で、始終ワキ役をつとめてくれた。

そのうしろから現われたのは、ガッシリした大男、顔つきもしつかりしている。別のガイドをつれてメー・ド・グラスからエグイユ・ヴェルトの麓にあるクローヴェルクルのせまい小舎に泊つて、大ぜいひしめき合つたとき、ほかのお客をつれて來ていたのに、たつた一人の東邦人である私に暖いスーブをふるまつて呉れたバルマであつた。

二人ともなつかしがつて、あの時のことを話したり、その後の話を聞きたがる。あれから日本に歸つて近ごろまた來たのだというところ、ジュールは「私も今年六十を越えたのでボーターになり下りました」と微苦笑をもらし「旦那はその後のほうはどうです」といふながら、そばに立つてやりとりを聞いていた妻を頭から足の先までながめてから、「おくさんが出來てはネー」とくびをかしげるのであつた。

かたむく陽をうけての立話しは果てしもなく、發車の合圖にうながされ、小さい箱につめ込まれて下につくまで止まなかつた。少しばかりはずんだ酒手を受取つて、うれしそうに歸つて行くかれ等の後姿は、私の山の思い出の一コマとして、いつまでも残っている。



ある登山家の邂逅

その三

成瀬 岩雄

『我々は十日午前三時半に林の寢床を離れた。四時少し過ぎに正に出發せんとした、恰度その時、朝の陽で、サンマルティノの方からやつて来る五人の一隊を見出したのです。他に旅行者があらうとは考えにも及ばなかつたし、ツオッカパスは密輸入者達が好んで集る所であるから、現に我々は前日、二人の密輸入者に遭つてゐるし、又新たに別の奴が何の商賣でやつて来たのだと思つたのです。』

所が我々自身も密輸入者と間違えられました。併し僕が立つていた暗い狭路を彼等が通り過ぎて行つた時に、どこか三人の風格が密輸入者と違つてゐると思つた。『さうな、思わず僕をして「あなた方、一體何處へ御出掛けですか」と言わせたやうな紳士風の三人が現れたのです。』

この薄暗からの突然の挨拶には吃驚したらしいのですが、僕は彼等はフォルノ氷河

の方へ行かうとしてゐるのだという事が直ぐ判り、その一隊というの、あのフレッシフィールド夫人の著書「グリソンの夏の旅」の中に出て来る「D」註(二)、若い方のフレッシフィールドとウォーカー・ビーチクロフトの兩君、シヤモニのフラソワ・デヴァッスウとバル・ブルガリアから来たボーター一名より成る一隊である事が判りました。

彼等はパス・デイ・ボンドを越えてバーニにやつて来たので、バーニを今朝二時に發つてフォルノ氷河へ行かうとしてゐるのでした。我々のこの奇遇は愉快でした。彼等は連邦政府發行の地圖を持つてゐないので、何處から山稜をやつつけてよいか、正しい地點について考えが混亂してゐるようでしたが、我々の地圖が大變助けになりました。若し地圖が無かつたら先生達は恐らくずつと西の方へ寄り過ぎたか、フォルノ峰の右の麓の方に寄り過ぎたか、或はもつと西側の方へ行つてしまつてゐたかも知れません。

シツソネの山の方へ出来るだけ行けと私が注意を與えたのですが、地圖を按じて見て確信を得たようです。そして安心して、我々と一緒にピオダーアルブ迄登つて行きました。

僕は彼等が一日待つて、我々と一緒にデイスグラチアを登つてから、みんなで一緒に翌日、パスを越えようじやないかと勧誘して見ましたが、フレッシフィールドはサモンリツツで彼の兩親に會わねばならぬと

いう時間に縛られて居り、食糧もたつた一日分しか持つて居らず、我々と合同すると、我々の食糧も翌朝の分が危ないので、そこで我々はピオダーアルブの一番高い處のマローヤのシャレー迄辛い登りを一緒に二時間半程掛つて上り、其處で別れました。そこに我々は荷物の一部を置いて、暫らく休みました。

……此處に……忘れましたが、我々がバル・メローとサソー・ビツソとの山稜で休んでいる時に、フレッシフィールドのバーティをチラツト見ましたが、残念な事には彼等はずつと右の方、即ち東の方から遙かに離れた所のシツソネの山の南東のすぐ近くの氷河とコルの所に取つてゐて、バル・マレンコーを見逃してゐるようでした。しかし、この間違が判つて左に曲つて岩を傳つてシツソネを登つて行きました。そこで先生達は我々から見えなくなつてしまひました。後日、判つたことですが、先生達はシツソネの頂上を越えて、フォルノ氷河の反対側を下つて、我々が前日別れた所の寢た場所から約十三時間掛つてマローヤに到着したそうですとタケツトは言つてゐる。

タケツトとしてもたとえこの「若い方の」フレッシフィールドが未だ、アルバイン・クラブの會員でではないとしても、遙々同國人の若い學生に、こんな山の中でバツタリ遭つたのは矢張嬉しかつたのであらう。しかもタケツトは「若い方の」フレッシフィールドといつてゐるのに對し、フレッシフィールドは一應敬稱を用いてゐるのも、そ

の先輩に對する敬意の程が何られて誠に麗しい風景ではないか。

タケツトにしてみても、その後輩を思う情溢れたる誠に微笑しき書簡ではないか。さすがは正に百年の傳統を訪らんとするアルバイン・クラブの光輝ある歴史も矢張この先輩、この後輩あつてこそと感ぜしむるものもあながち私ばかりでもないと思う。

まあ天下廣しと雖も、然し、之だけの大舞臺は島渡なからうではないか。フレッシフィールドにして見ればそれこそクギーの筆法を以てすれば「モンブランの殊勲」所ではなかつたらう。しかも尙、彼の背後には既に幸運の女神が手を差し伸べてゐたのである。というのは、彼は同年十二月、願叶つてアルバイン・クラブに入會を許され、遂に彼が述べてゐる通りに、この奇遇がキツカケとなつて、その翌年には一夏、タケツトに連れられてバルニナ山群を歩いているのであるから。この時こそ、彼の胸にはA・Cのバツチが光つてゐたことであらう。

後年この「若い方の」フレッシフィールドが、第十一代のアルバインクラブの會長にならうとは神ならぬ身の誰が知つてゐたことであらうか。

以上は皆、兎に角、遠い異國の登山史上の人々のことで、しかも私など生れる以前の話で、唯、書物の上で覺えた一つの史實に過ぎないのであるが、もつと身近な例としてこゝに記して見たいと思ふのは、以前「山岳」に木暮さんが大島亮吉君に邂逅されて、秩父の山の話をされてゐる話のつ

ているのを、心ある讀者は覺えていられると思うが、木暮さんが横さんを通じて秩父號の原稿を大島君に頼まれたところ、

『其後十日程も過ぎた或日の夕方、日比谷公園附近を散歩中、軍服姿の人に舉手の禮をされたので、吃驚してよく視るとそれは大島君であつた。早速寄稿の承諾を得たお禮を述べて、秩父號の話をしているうち、つい山の方に話がそれて、立つた儘一時間近く喋つてしまつた。その時秩父の山から受ける感じは、何といつても女性的で且情緒的であるといふことに意見が一致したので、特に話が弾んだのであつた。』

と木暮さんは記して居られるが、この短い一節を私は何回も何回も讀み返して見て、實に萬感胸に迫るを禁ぜられないのである。木暮さんのあの「本遺稿について」を讀めば讀む程、あんな意味深長な名文はないと思うのである。

大島君が日頃懐いていた先輩に對する敬虔なる態度と、慈父の如き木暮さんの温い言葉に溢れたあの一文は、實に、まばゆきばかりの光景を躍如たらしむるものではないか。それは前に述べた單なる史實とは違つて、木暮さんや大島君となると幸、私もよく知つてゐる登山家であるし、殊に大島君とは屢々山歩きを共にしたこともあり、現にこの秩父も一緒に歩いているし、あの中に出て来る「ミヅカキ山」とか「武尊山藤原側」とか「惠比壽大黒を笹川上流より」等は、大島君と二人だけで歩いたので私にとつては木暮さんのお話はなんとも云えない、感慨無量である。

日本の登山界に夫々一つのゼネレーションを劃したこの偉大なる登山家が、日比谷公園で一時間も立話をしているその光景。それは何も知らない者から見れば、まあどう品目に見ても田舎から出て来た親父が兵隊に出ている息子を轎つている光景というのが關の山かも知れないが、我々にとつては正に涙の出る程、麗しき光景なのである。大島君にして見れば、陸軍大將と話をするよりも餘程嬉しかつたであらう。彼のギドー・レイとウインパーのテオドル・パスの邂逅が西歐のアルプスの登山史上に残され名文であるとすれば、あの木暮さんの「本遺稿について」こそは當然日本の登山史上の一つのエピソードとして残さるべきものだと思ふのである。

まあ、我々俗人であつたら、「近所でお茶でも飲みながら」とあり來たりの御世辭でもいふ所であらうが、御兩人にとつてはそんな時間も惜しかつたのである。パンチに腰掛ける時間すら惜しかつたのであらう。私にはその氣持がよく判つてゐるような氣がするのである。

大島君の山登りに對する眞摯なる考えは今更こゝに喋々する迄もないが、當時としては彼も云つてゐる通り、新しい、スキーでの登山とか、岩登りとかの登山法が流行して來て、又現に彼自身もそのパイオニアたるの榮譽の保持者でありながら、聊も奢る所なく、唯只眞摯な學徒として山登りに専心し、讀書に耽つていたのである。あの頃の「登高行」を見ても判るだらう。あれが學生の手になつたものとは、當時と

しては唯驚嘆の外はないのである。しかし彼はあれでも満足していなかつたのである。というのはいく「オックスフォード・マウンテンヤリング・エッセイ」みたいなものにしたいと言つてゐた。

當時、日本山岳會の沈滞とか、改革とか、やれ、アルピニズムとかいうことで、まるで冬山でなければ山登りでないような言動をなす學生群もあつたが、彼はそんなことには眼もくれず、新しい登山法を味わいながら、又一面には日本の眞當の山の姿も心底から愛し、味わつてゐたのである。日本の登山界の先輩に對する禮はチャント心得ていたのである。木暮さんや田部さんに對して彼は「この古山脈先輩者、秩父の山歩きの父」と迄言つてゐるのも彼の裏心からの言葉である。

彼の日本の登山界に及ぼした測り知れぬ影響は誰が否定するであらうか。徒らに改革を絶叫したグループと、黙々と登つた彼と、何方が後の日本の登山界に大きな影響を與えたかは、今更私が喋々する迄もない。それは諸賢の御想像にまかせよう。

今假に「先輩者」がなかつたとしたらどうであらうか。どんなつまらぬ山岳書でも彼の名前の出て來ないものは殆んどないといつてもよいであらう。現にこの私なども倅そうに、マンメリーだの、フレッシファイールドだのといつてゐるが、彼との交友がなかつたら恐らく、山等、とつくに止めてしまつてゐるかも知れないと思うのである。

今日、外國の山岳書の翻譯等、無數にあるが——勿論決して、どの翻譯も或數を除

いては、譯として勝れたものであるという意味では毛頭ないが——翻譯しようという動機そのものが、既に彼が日本の登山界に残した大きな業績だと私は思つてゐる。

最近私の敬愛する山友達が教えてくれたのであるが「和文英譯の作り方」という書物の中に、大島君の「峠」が我國では一流といわれる文豪連、芥川龍之介、永井荷風、其他の連中に伍して引用されているのを見て驚いたのである。しかし靜かに考へて見れば當然のこと、彼の作品が文學的にもいかに高く評價されているかがここに示されてゐると私は思う。「峠」の英譯については、以前「會報」に私もチョット書いたが、實際、これを見た時、私は心中ひそかに、彼が生きていたら「だから僕の言わないうことじゃないやないか」とはがゆい思ひがしたのである。

註(一)「D」とは正確にいうと、ダグラス・ウィリアム・フレッシフィールドの事である。「グリソンの夏の旅」は女流登山家なる母、ヘンリー・フレッシフィールド夫人がこの前年に著わした旅行記で、該書の中には、ダグラス自身も寄稿しているところであるから、タケットとしては、判り易い様に右夫人と區別する積りで「D」に「若い方」とでもつけた積りではないのであらうか。勿論、後輩に對する愛稱の意味も含まれてゐると思うが。残念ながら私は未だ該書を見たことがないので、よく判らないが。

會費の

増額について

昭和廿七年度の本會々費増額について説明し、會員諸氏の御諒承を頂きたいと思ひます。

會費 廿六年度 廿七年度
三〇〇圓 六〇〇圓

ルーム維持費

(東京在住會員のみ負擔)

入會金 一〇〇圓 二〇〇圓
三〇〇圓 一〇〇〇圓

團體登録會費

二〇圓 廢止

(別に支部費のあるところでは支部費を徴収)

三〇〇圓の會費で「山岳」會費二
三〇圓と會報を六回出し、啓蒙
活動をなし、會を維持して行くこ
とが如何に困難であるか直ちに
想像頂けると思ひます。刑行物へ
の廣告や、山日記の印税で別途
入を計つても收支をつぐない切
れません。昭和廿五年度以前の赤
字繰越約六萬圓に加えて、廿六
年度だけで約十一萬圓の赤字が
出てしまひました。

終戦後本會が體協に加入し、従
來の事業のほかに大衆啓蒙活動も
して行こうという氣運が強くなり
ました。そしてなるべく多くの
に會員になつてもう爲には、出
來るだけ會費を安くせねばなるま

いということになりました。その
結果一時は會員數が非常な勢いで
増えました。各地に相次いで支部
が出来たのもその頃です。この方
針によつて會がよい働きをなし發
展したことも事實であります。

しかし時がたつにつれて、會費
が安いなら入つて見よう、入會し
てすぐ具體的な利得があり反對給
附があるなら入會しようという様
なこと出来た會員は、結局會を
維持して行く熱意に缺け會費の納
入を怠る人々であることがわかつ
て参りました。そして残る人々
は、日本山岳會を自己の登山生活
の一つの據り所と考え、或る時代
の會の方針や役員のやり方にあき
たらぬ場合はほとんど批判し忠告
するとしても、結局は氣長な目で
會を見て居り、これを維持し育て
て行くという眞の優秀な會員で
あります。當然のこととしてこれ
等の人々はよく會費を納入してく
れます。現在そのような會員は約
七〇〇名あります。數年來のこの
ような傾向を見て根本方針を若干
變更せねばならぬ時期が來たと考
えるに到りました。勿論昔に還る
のではなく、長い立派な傳統の上
に立つて、日本によい登山社會を
作つて行く。例えばその一つの方
法としての國民體育大會登山部門
などもやらねばならぬ間は、はに
かんだり臆したりしないで眞面目

に懸命にお世話して行く。しかし
會そのものの構成を廣い大衆の基
盤の上に立て、それ等の多くの
會員から會費が入つて來なければ
會が運営して行けないというやり
方はとるまい。數は少くとも質の
よい會員を以て構成し維持して行
こうということになつて参りました。
これ等の點を考へて數回理事
會にて審議し更に各支部長にもお
はかりした結果前記の數字が出た
のであります。團體登録會員とい
うのは、メンバー數名からなる或
るクラブが本會に入會して、入會
金、會費は一名分を納入し他は毎
年一名あたり、二〇圓の登録會費
さえ納めればメンバー全部が日本
山岳會員になれるという制度であ
ります。一時は多かつた登録會員
も減少して現在では殆んどありま
せんので、この制度も廢止したい
と考へています。

尙ルルムの維持は今迄これを利用
する機會の多い東京附近在住會
員に御願ひして行きました。本年も
このやり方を繼續して行きたいと
考へますので、在京諸兄の御諒承
を頂ければ幸いです。右の事情を
御賢察の上、この増額案に御賛成
下さり、更に進んで早目に會費を
納入して會の運営に御協力下さる
ようお願い致します。

尙又會費の一時拂ひによる終身
會員制度復活を希望される方もあ

ると聞きましたが、まだ色々なこ
との落着かない時でありますので
その決定は暫く保留致します。併
せて御諒承下さい。(林和夫)

會員通信のこと

會報は廣く會員に開放されてい
るもので、會員である限り、誰彼
の區別なく投稿してもらいたいも
のであるが、特に會員通信の頁は
會員から自發的に寄せられる通信
のためにおかれてある欄である。
その他の頁は、時に編集者の意圖
によつて、寄稿を依頼する場合が
あつても、通信欄は、會員から、
近況報告なり、簡単な旅信なり、
會に對する希望なり、連絡なりを
手輕に送つてもらつて、それを掲
載する欄である。

近頃、一向に會員通信が振るわ
ないのはどうしたことか。このこ
とは、とりもなおさず、會員と會
との間の連絡が、密接でない證據
であつて、會にとつてあまり感心
したことはない。會員の會に對
する考え方が、昔とは大分違つて
きているようであるが、一つには
會の動き方、運営方針などが、會
員にアツピールすることが少ない
からなのかも知れない。假にそう
であれば、そんなことも遠慮なく
書送つてほしいものである。

(網者)

山 上 展 望

人を見たら泥棒と思
えというのは、餘り感
心したことではないが
この國からこういう言
葉をなくすべく現在の
國の民度は餘りにも低
いことを痛感する。浦
松佐美太郎氏(元本會
理事)は「食後の教養」
のなかで、このような泥棒思想
は、日本の文部省が感じ易い兒童
の時代に、既に植へつけているの
だ、と述べている。小學二年の教
科書にある羽衣は、他人の衣を無
斷で持去る漁師の話であるが、そ
こへ所有者の天女が現われても、
返せ返せ返せぬで頑として應じな
い。最後に舞をやらせる交換條件
で、衣はようやく所有者にかえつ
た。まことに厄介なしろものと言
わなければならぬ。
J.A.C.の圖書室に備えつけの
圖書が開室以來既に幾冊か紛失し
ている。なかには會員が愛蔵の書
を會のために寄附したり、既に稀
書の列にはいつた文獻を、相當な
價でわざわざ買つて寄附したもの
が持ち去られてゐる。心ない仕業
であるが、山の世界は、山へ行く
者に限つてなどと、特別善良な人
間の集りかのように考へていたこ
とが、實は大變な思い違ひであつ
た。山岳會は天女の舞いのできな
いから本は再び戻るまい。(〇)

ピイター・フレミングのこと

田邊主計

ピイター・フレミングの「ニッパ・フラム・タタリイ」(ダツタンの便り)について會報六一號(一九三六年一月)に書いたのも十五年前のことになる。この會つた事のない人との紙の上での再會を、私はこゝに書くとする。

フレミングに初めて接したのは彼のソヴェエト・ロシアから日本のこしらえた満洲國に入り支那を南にぬけ、ホンコンから日本を経てマンハッタンへの旅行記「ワンズ・カンパニイ」が出版された翌年一九三五年に讀んだ時である。そして一九三三年に出た前著「ブラジリアン・アドヴェンチュア」を、さかのぼって買ひ求めたのであつた。「ダツタンの便り」は一九三五年の二月からその年の秋にかけての、支那からフンザの方へぬける旅行記であつて、翌年一九三六年五月の序文の日附でジョナサン・ケイブから出版されたが、當時は本も早く来たから、この本を東京で九月に讀むことが出来、さつそく、あの紹介を書いたのであつた。一九三七年か三八年か、

いつであつたか覚えていないが、英米は敵だと軍部や役人が宣傳している頃、或る雑誌に排日作家十何人とかいう題で日本の爲にならぬ事を書くやからを列舉している内にピイター・フレミングの名があつた。恐らく、右の満洲國見物記が氣に入らなかつたのであらう。オエン・ラティモアやフリダ・アトレイなんかも出ていたと覺えている。アトレイの「日本の粘土の足」は注文したら輸入禁止ですということだつた。その頃私の友人の一人(イギリス人)にこの話をしたら「フレミングを排日作家と言うのなら彼は同時に排英作家でもある」といつて彼女は笑つたが、こゝでまた、松方三郎氏の「遠き近き」の中のウィリアム・シエクスピア氏が墓掘の口をかりて言うイギリスに對する言葉……:「There the men are as mad as he」(ゼアはイングリランドであり、ヒイはハムレットである)を挙げれば、この大先輩も、日本式にいうと、排英作家というわけである。

フレミングは結婚して夫人と共に印度支那だか雲南だかを旅行をしたとかきいたのは一九三七年頃ではなかつたかと思うが、そして二三日東京へ立寄る。私が彼の本を好んだことを知っているそのイギリスの友人が、彼に會いたくなく

いかと言つてくれた。年月がはつきり思い出せないのは残念だが、大いに楽しみにしていた所、どうにも時間が無いという事だから、せめて、あなたの持つてゐる本に署名を貰つてあげようということであつた。私は何となく、又會える時があるような氣もして頼まなかつた代りに一人の友人(この人も山岳會の古い會員であるが)が矢張り、「ニッパ・フラム・タタリイ」を持つていたので、その方を渡しておいた處署名されてかえつて来た。尤も、この本はこの間の東京空襲で焼けてしまつたそうである。

一九四〇年ドイツがノルウェーに攻めこんだ時、イギリスはノルウェー作戦を起した。フレミングは志願して彼地へ赴き、そして戦死したという記事がちよつと日本の新聞に出た。當時は英國大使館の人々がまだ東京にいたので、六月頃だつたが、この事をたづねた處、別に確かなことはきいていないという事であつた。戦後「フレミングがアメリカにいた」という記事をどこかで見たような氣がして、半信半疑でいた。ところが最近タイムズのリテラリー・サブルメント(主にこれから私は新刊の山の本をさがして會報に取次でいる)の七月二十七日ので偶然 Peter Fleming の名が目につ

た。それはジョナサン・ケイブから出た Norman Lewis の A Dragon Apparent という印度支那旅行記の廣告にフレミングがスベクテイタに書いた評の一部を擧げていたからである。この旅行は一九五〇年に行われているから、フレミングの健在なことは確かである。私は、あわてて、一九五〇年

昭和廿六年度會費

★年額 三〇〇圓

(基本額一五〇 山岳代一五〇)

★東京支部五〇〇圓

(基本額山岳の他圖書室維持費一〇〇 支部費一〇〇)

愈廿六年度最後の月となりました。本年度會費未納の方は必ずお納め下さい。本會の財政は別項の通り赤字でありますので、二十六年度會費未納の方には止むを得ず次號より會報の發送を停止いたします。

~~~~~  
のフズ・フウを見た。そして其後のいろいろの事を知つたのであつた。前に書いた三冊の本のあとに The Flying Visit と A Story to Tell が出ていと記されてい

た。  
更に私が初めて知つたことは、その夫人が Celia Johnson であることである。シリア・ジョン

ソには戦後、ノエル・カワードによる Brief Encounter (逢ひき) という題で、當地では上映されている」という映畫で初めて接した。その時の相手役の醫者になつたトルヴァ・ハワードに好感を抱いたり、人妻との逢ひきという話でありながら、この映畫は見る人にイギリス人への好感を持たせるといふ批評を見たりしたが、何事よりも私はこの婦人が忘れられなくなつたのである。映畫を見るような時間を私は餘り持つていない。しかも、この映畫を二度見だし、機會があつたら又見たいとさえ思つている。この婦人の聲が今でも耳に残つてゐる。

「ダツタンの旅」を共にした婦人 Ella mailart についても、時を同じくして Books to Come の今年八月號で、その新著「T-1 Push」の廣告を見つ、その健在を知つた。

「Turkestan Solo」の一人旅、フレミングと二人の旅、そして今度の旅行記は「travels in India with a cat as her companion」云々のやうな unmarried. 一九〇三年生れであるから、フレミングよりも四つ年上である。この婦人には既に數冊の著書がある。

(一九五一年一月)



佐藤久一朗氏作

## ティリチ・ミール

### 1950年のノールウエイ 遠征隊の初登頂

ティリチ・ミールの初登頂については會報一五二號にも簡単な記載があるが、最近のA・Jに詳細なレポートが載っているのでノートしてみよう。

ティリチ・ミールの高度は西峰が二五、二六三呎、東峰が二五、二三七呎で七千米級の中でも堂々たる貫録を示している山だ。

近年この山に注がれた研究は、先づ一九二八―一九九九年の印度測量局の調査で、その結果ティリチ周辺の天候について詳細な報告がもたらされた。

一九三五年、ドイツの學術遠征

隊が南方からティリチ・ミールの登頂を企てた。彼らが引返した地点は明らかでないが、一九、〇〇呎の主稜に達したものでらしい。

一九三五年、スミートン、ミラー、リチャード・オーギル等がティリチ山群を偵察した。この遠征の詳細は未発表だが、スミートンの手紙によると、彼らは數名の經驗あるシェルバを用い、ドイツ隊と同様南方即ちオウィール氷河からティリチ山群を攻撃した。彼らはダルゴル氷河と南バルム氷河間の山稜に登り、小ティリチとS氷河峰の間の後年ノールウエイ隊がCVを置いた直ぐ上部の山稜を攻撃した。登攀は順調に進みS氷河峰（約二二、〇〇〇呎）の頂に達したが、それから先の山稜は物凄く瘦せて急峻なため退却の已むなきに至つた。しかもBCに歸着すると第二次大戦勃發の報が待つていたので凡ての計畫を放棄せざるを得なかつた。

戦後ノールウエイ山岳會ではティリチ・ミール登攀の企畫が熱心に検討され、一九四九年には偵察行を派遣した。バキスタン政府の援助下でランダース・ヘーンとアルネ・ネースは、同年七月十日ティリチ・ミール南東最奥の部落バルムを後にし、以後二週間の偵察でほぼ二一、〇〇〇呎以上の地點に達した。

この結果同年の冬オスローではノールウエイ山岳會と地學協會共同の下に遠征の準備が進められた。裝備の點で改良されたのは、大型のポンプと高度に應じる口金とを附けたアルコールストーヴで二六、〇〇〇呎の高度でもよく燃焼し、今度の遠征で非常な効果を収めた。次には陽焼け止めの優秀なクリームを考案したことである。

遠征隊はアルネ・ネース（三八歳）、ヘンリー・ベルグ（二七）、ハンス・C・ブウゲ（四〇）、ベル・クヴェルンベルグ（三二）、フリド・ヨフ・ウォグト・ロレンツェン（四一）の五名の登攀隊員に、フィン・ヨルスタッド（二七）が地質學者として、ベル・ウェンデルボ（二二）が植物學者として参加し、寫眞技師としてラスムス・ブレイスティン、アイルド・ニイバツケンの二人が随行した。ロツク・クライマーで狩獵家のラホルのアブデル・ハミド・バグ教授は連絡將校として、チトラルのトニイ・ストリーサー大尉は一九四九年時と同様輸送指揮官として加わり、更にバキスタン政府の好意でラヂオ技師参加した。隊長にはアルネ・ネース、副隊長にはブッダが選ばれ、ロレンツェン博士は醫者の任務を擔當した。

一九五〇年五月廿七日遠征隊は

空路故國を發し、六月十一日南バルム氷河の末端に達し、同廿七日には一九四九年時のCV附近（高度一七、八〇〇呎）に前進根據地を設置した。

六月廿九日、南東山稜を觀察した結果、それは一九四九年の状態に比して悪く、雪量が多いので登路に選ぶことが難しいという結論に達した。それで七月三日、CVを一九、〇〇〇呎に設置しS氷河上部の偵察を開始された。併しこの氷河の雪の状態もCVから南稜へ往復するのは極めて危険であることが判り、S氷河を登路とする方針は放棄せざるを得なかつた。此の二登路が採用出来なくなつたので、彼らはティリチ・ミールの本體に直登する別のルートを見出さなければならぬ段階に到つた。CV或いはS氷河上部から見上げると、僅かではあるが印象的な雪稜がティリチの絶頂近くから垂れ下つてゐる。それは少なくとも高度二一、〇〇〇呎迄はそう難しくない。そこから、ティリチの主壁を徹り急峻な氷河をトラバースしなければならぬ所が問題だが、あとは南稜上二三、三〇〇呎の地點に辿り着いて最後の急登をすれば登頂は可能だ。これが三番目に選んだルートである。

七月六日、ネースとブッゲはこのルートを登つたが、高度二〇、〇〇〇呎で高さ二〇〇呎の極めて急な雪稜に達した。而も積雪は腰以上に深く雪崩の懸念が感ぜられたので一旦はこのルートの放棄をさえ考えた程だつた。

翌日、綱・ビッケル・アイゼン・アイスハーケン・雪靴等を準備して、その急な雪稜の下に達し、クヴェルンベルグの努力が功を奏して悪場を乗切り固定綱を取付けることが出来た。其の夜CVで第一回の登頂メンバーをベルグとクヴェルンベルグに決定した。

七月八日、CVは高度二〇、五〇〇呎に設置され、續いて二一、五〇〇呎にCVの準備がなされた。第一回目の攻撃はボーターなしで試みられたが、深雪に加えて各自四五十ポンドの重荷のため、疲勞困憊して退却した。併しこの結果二二、〇〇〇呎にCVを設置すれば第三の豫定ルートは餘り技術的の困難なしに頂稜に達し得る確信を強めた。

斯くて彼らはこのルートで次の機會をねらつたのだが、雪の状態は激變し始めた。急速な融雪の結果堅氷の層が現われ、今度は丹念にステップを切らなければならなくなつた。天候急變の危険も亦増大した。一九四九年の経験からすると、七月後半はティリチ・ミールの山頂附近には風と雪と濃霧が襲



い、雪崩の頻度も増えるのだ。

次の攻撃にはネースとブウゲが當ることになったが、ブウゲの肺炎が全快しなかつたので、ベルグが代つた。ネースとベルグに對してボーターは僅か三人だつたのでこの人数でキャンプを設置しながら着實に登る場合には、登頂のチャンスを選する心配があつた。從つて別にクジュエルンベルグがラッシュ・アタックを企て、この兩者を同時に實行することになった。又ストリーサーはネースの隊に參加した。

七月廿日最後の攻撃がCVからなされた。午後にはCVに達し、翌日CVに、廿二日にはCXを頂上二三、四〇〇呎に設置した。此處まで同伴したフンザのボーター二人と一七歳のアブデール・カリムはCVへ下つた。ネースはせめてカリムを彼らの故國の代表者として頂上へ連れていきなかつたが、カリムの疲勞が甚だしかつたので断念した。

一方クジュエルンベルグは七月廿一日早朝に出發し、廿二日本隊が頂上二三、三〇〇呎に辿り着いた時早くも本隊を追い越して、その夜は二三、六〇〇呎の地點に露營の豫定でいた。併し時間に餘裕があつたので、彼は登頂の決心を固め更に前進を續けた。頂上では

深雪に悩まされたが特に技術的な困難はなく、幸い好天に恵まれて遂に午後六時廿分、十時間の苦しい登攀の後ティリチ・ミールの頂を踏んだ。そしてCXの本隊の處へ戻つたのは午後八時だつた。その夜CXではさうやかな祝宴がもたれたのは云う迄もない。

二十三日早朝、ネース、ベルグ、ストリーサーは國旗とカメラをもつて午前七時に出發し、夕刻六時に頂上に達した。二五、〇〇〇呎

## 京都大學 A・A・C・K

ヒマラヤへ

加藤 泰 安

を超える絶頂からは雲上に西部カラコラムやナンガ・パアルバットの雄峰が望まれた。

數日後彼らは南バルム氷河の美しいCに歸着し、一方科學班も貴重な資料を數多く採集して顔を揃え、無事この遠征の目的を達した。

尙詳細は左記を参照されたい。  
"The Norwegian Expedition to Trich Mir, 1950" by Arne Naess (A.J. No. 282—May 1951) (望月達夫)

のみではあるまい。

京大遠征の母體であるA・A・C・K (Akademik Alpine Club in Kyoto) の會員が、京都という地理的條件や、中心となるメンバーの境遇にも大いに關係があるとしても、幾度かの挫折にもめげず二十數年間に亘り、常に殆んど血縁的な繋りを持ち続け、ひたすらヒマラヤを目標とし、數次の遠征登山や探險を行い、後輩の養成や遠征技術の鍊磨に精進を續けてきた成果がここに現われるのであつて、殊にその構成は、同會と密接な關係のある、京大生物誌研究會

との合同科學探險隊であつて、その成果はただに登山の域に止まらず各界からの大きな期待がかけられてゐるのも當然な事であらう。戦後七年、我國の登山界も大いに立直り、既に早稻田大學のアンデス、福岡山の會のヒマラヤ遠征計畫も發表され、ようやく多事ならんとしている。一方海外に於けるヒマラヤ遠征も、アナブルナに引續きエヴェレスト隊等、本格的なデヤイアント・アタックが續々と計畫され、今夏ヒマラヤに入る遠征隊は大小合せて、日本以外で八隊に上ると傳えられている。

此の際に於ける京大の健斗を望むや切なるものがある。

しかしながら此處に一つの問題が考えられるのは、今年日本より京大、福岡山の會の二隊がヒマラヤに入るといふ事は如何なものであらうか。我々日本人から考えれば、各々別個のものであり、二隊出ようが三隊出ようが一向不思議はないが、外國ではそうはとるまい。狭い貧乏國の日本から二隊がお互に何の關係もなくヒマラヤに入るといふことは少し奇異な感を抱かせはしないだらうか。現にインドに於てはその聲があるようである。

互に傳統も違ひ、隊の構成も異なる上に、大切なチームワークの點

で、合流するという事は非常に困難なことであるが、二隊の間で何とか話がつかぬものであらうか。困難ではあるが決して不可能な事ではない。又或は時期的に一方が譲るとか、何とか方法がないものだらうか。

又この問題を離れても、同じヒマラヤを目指す兩隊の間に温い連繋があつてしかるべきである。現在の所では兩隊の間には何等連絡もなく、互に知り得た情報の交換もないようである。これでは困る。共にヒマラヤを目指して精進を續ける兩隊が互に助け合つてこそフェアな態度というべきではなからうか。

又日本山岳會としても、福岡山の會が後援を頼んで來た際に、その構成メンバーが如何なる人か全く知らぬため、會としての後援を断つたと聞いているが、これは只知らぬ團體に對しては會として後援が出来ないというに止まり、相手にせずという譯では決してない。むしろ戦後初に名乗りを上げた同會の成功を大いに期待して出來得る限りの援助を與えるべきである。一方京大のメンバーは殆んどが本會の會員であるため個人的ではあるが、多くの人から少なからぬ支援を受けてゐるのに、福岡に對しては現在の處全く知らぬ顔の

形になつてゐるのではあるまいか。その人を知る知らぬは別として、同じ山岳人として温い友情が積極的に差し伸べられる事が望ましい。

更に又一つ進んで、この兩隊の困難な問題についても、よりよい解決を求める努力が拂われないものであらうか。

京大の遠征が具體化すると共にそろ／＼本會の乗出す時期も來たように思われるのである。

## 山日記のこと

ども

藤島敏男

一九五二年度の山日記が三月になつて漸く手に入つた。昨年の内に出來上る筈なのが、製本所の類焼などという不運に見舞われたからだという。遅れたにしても、立派な出來栄えの山日記を手にする喜びは大きい。僕などはその日その日の日記を書いてゐるので、手許に山日記がないと何か物足りない氣がする位だから、人一倍嬉しいのである。

新しい山日記を開いて「第十七集」とあるのを見ると、山日記も甲羅をへたものだなと泌々おもしろ。たしか始めて山日記を刊行し

たのは一九三〇年だつたから、十七集とはいふものゝ、戦中戦後の中絶期間を加えると二十二年の歴史を持つてゐることになる譯である。いま大學山岳部で活躍してゐる猛者達が生れるか生れない頃から山日記は出てゐるのだといへば古さの實感が出るだらう。

僕は「山岳」の揃いも、山日記第一集も焼亡したので——チエホフの言い草ぢやないが「こりやみんな軍人のせいだ」——山日記刊行の動機や「山日記」という名の由來なども、いまこれを探ねる方便がないのは残念だが、ともかく當時松方三郎君の手許にあつたスイスだか獨逸だかの「登山家必携」といつたような、日記欄もついている小冊子をお手本にして始めた仕事だつた。

「登山の注意」以下われ／＼の手で、なんとか纏められる項目は別だが、山小屋、山案内はどうしても地元の小屋主や案内人組合へ照會しないことには皆目判らない。調査要項をガリ版で刷つて、メクラの手探り然と方々へ照會狀を發送するのも中々の苦勞だつたが、さて集つた資料を整理して印刷に廻らす原稿に纏上げる段になつてどうにも手がつけられない。その年の三月、或る日曜日、虎ノ門のライブラリーに松方君と僕

それに會員の成瀬岩雄君を呼出し三人で山小屋山案内の資料整理をやつたのを想ひ出す。結局この大に於いて混沌然たる資料をコナす能力と時間とは、三人とも持合せないということになり、ヒマがたつぷりあつて、しかもマメな人を會員の中から探出して、拜がみ倒す以外に解決策なしということであつた。

この條件にピッタリという會員角田吉夫君に白羽の矢が立ち、僕が拜がみ倒し役だか、押付け役だかを勤め、爾來七八年の長きに亘つて角田君が、山日記を殆んど一手に引受け、大變な苦勞をした譯で、日本山岳會會員は平地でも遭難するという實例を示した。然し同君のお蔭で山日記の基礎はすっかり固つたのである。近年角田君の消息をきかないのは、遭難の因をなした僕にとつて氣になることのひとつである。

## “ARIZONA HIGHWAYS”

アルバータと因縁の淺くない例のアイレス氏（在ボートランド）から、最近本會圖書室のために「アリゾナ・ハイウェイ」という雑誌を豫約したから、貴會員諸氏におかれて御覽を乞う旨の手紙が

きた。重ね／＼の厚意に感謝してゐると、その第一回分（一九五一年十二月號）がルームへ安着した。菊倍版アート紙二〇頁、總原色寫眞版の美麗な雑誌で、アリゾナの風物がたくみに再現された、たのしいものである。同氏の厚意を謝しつゝ一寸お知らせする。

(T・M)

## ☆山岳の發刊☆

山岳の刊行については、最近の役員總會で一九五一年度（四十六年）及一九五二年度（四十七年）の二回分を一冊とし、なる可く早い機會に出版することに決定されました。右は現在の會の財政上已むを得ない臨時の措置で、今後は一年一冊の方針を堅持したいと思ひますから、此際何卒御諒承願いたく存じます。と同時に山岳への會員各位からの御投稿を切に望んでおります。尙次號は既に編集に着手、豫定の原稿も逐次集まりつゝあるので、内容の豫告等は次の會報で發表の豫定です。

山岳編集委員

訂正 成瀬岩雄

會報一五八號四頁二段

「パンチは有名な地酒のヨストを混じたるもの」と書きまし

が、其後入手した二、三の文獻によれば、右は大變な誤りである事を發見、こゝに左の如く訂正します。

「パンチは彼の有名な、老ヨストによつて作られ、このパンチは……」と。

即ちヨストとはウキンパーのアクシデント時代からモンテローザホテルに働いていたホテルのボーターの名前で、此處に集る御常連には永年顔馴みのボーターであり、又バーテンダーでもあつたらしいのである。

クギーのこの記述は一八八六年の事であるから、ウキンパーのアクシデントの一八六五年から數えても二十一年動續、又其後、ストラットの記述によれば一八九五年には未だ健在で活躍してゐた、とあるから、三十年以上動續してゐる事は確かで、モンテローザホテルをアルバインクラブの延長位に考へて居り、現にマルチン・コンウェー卿等は、「クラブというよりも Family という感じがした」と云つてゐる程の當時の A・C の御定連にとつては、この老ヨストは「クラブのボーイ」位に馴みの深かつたボーイであつたのであらう。ル・ブロード夫人等はその著書にこのヨストの寫眞迄載せてゐる程である。





上田哲農氏 作

## 信 通 員 會

### ザミとの再會

高木 正孝

「山岳」四冊まさしく入手いたしました。一冊はスイス山岳會宛とのことでしたのでサミュエル・ブラバンドに會つてよろしくたのみました。一冊はブラバンドに贈りました。また、一冊はアカデミイ・アルペン・クラブ・ベルンに届けました。

私はブラバンドをベルン州政府のいわば建設大臣室に訪ねたのですが、いかめしい取次の秘書に導かれて大臣室に案内されました。

すると、大臣、スキー靴にカイルホーゼ、ネクタイもなしにスエーターといった姿で、大變喜んで迎え入れてくれました。今朝グリーンデルワルドから下つてきたのでこんな姿で失禮！」という譯です。

四年前よりもかえつて元氣そうにみえたのは、大變嬉しく思われました。早速松方さんがみえられたことの喜びを述べられて「ヘル・マキはいかゞです？ ヘル・マキはやつてこないか？！ やつてこないか？！ やつて来たなら自分も休みをとらねばならない。」といつていました。また自分は山登りの代りにいまや自動車道路を造つてゐる。自分はこの仕事に興味をもつてゐると大臣はおつしやいます。

「山岳」を贈呈して色々話しましたがヘル・マキの寫眞を見て、チットも變つていないと嬉しそうでした。またアルバータの銀のピッケルの話すると大變面白いつて大いに喜んでいました。尚スイス山岳會には中央委員會がありますが、特定の事務所はなく各地のまわり持ちで、今年はグラールス州にあり、ブレゼデントをザミは個人的に知つてゐるから雑誌交換の件についても手紙をかい

盡力しようといつてくれました。

それから色々な話がでて伊集院さんの來られた話やら日本の話、そして土曜會の話やら、諸先輩のお話しがでて昔話もしましたが、更にザミの家族、それから話はグリーンデルワルドに移り、いま「エミール父さん」、グリーンデルワルドの村長さんであり、カーリング選手権を今年もとつて、相不變元氣なことなどの話となつて、どうも大臣の仕事は大變邪魔してしまつたわけです。

去年は夏は雨ばかりでほとんど夏がなく日本と全く正反對でしたが、秋になつてよい天氣が続いた後に、今度は稀にみる永いフェーの期間があり、アルプスの南及び北イタリに豪雨が降りポー河が氾濫して大水害をもたらししました。

そして冬になつても雪がなくスキーもあきらめていたのですが、昨日の土日にスキーをかついでグリーンデルワルドに行つて來ました。今年の冬はそれでもスキー客でまにみる盛況で、昨日もホテルはどこも満員でした。例のゾンネンベルグに荷をおいて街を散歩します。昔の知人達に挨拶しつゝ「エミール父さん」を訪ねました。

こゝでも「ヘル・マキに會つたか？ どうしてゐる？」です。横さん！ どうしても一度やつてこなくては駄目ですね。松方さんや島田さん

そして伊藤憲さんの噂をききました。その元氣なのは驚きかつ心から喜びました。田口二郎や一郎兄の話から、昔話になるところにザミの一番上の娘グリーティーが旦那さんと訪ねて來、そして古い寫眞から新しいのまで見せて貰いました。夏の「エミール父さん」と「ブラバンド母さん」松方、伊藤兩先輩の寫眞、島田さんから送られてあつたのを見ました。それにアイガー、ミッテルレギー當時の寫眞もありました。ザミ、若きヘル・マキ、シュトイリ、アマッテルの並んでゐる奴です。

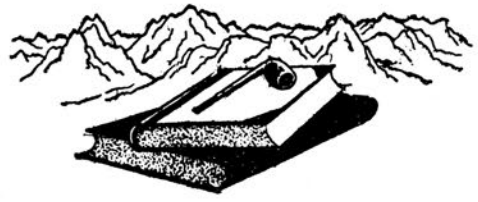
藤島さんと磯野さん等の話からゾンネンベルグに最初に來られた山崎先生の話しになり、Nathaniel Professor と「お母さん」がよんでいましたが、山崎先生或る日のことルックサックがないと家中さがしまわつておられたが、「お母さん」は山崎先生がルックサックを村にもつて下りられたのを見たので、その事を言いますと漸く山崎先生御自身で修繕にキスリングのところにもつていかれたのだつたとか、大笑いでした。話

は村の知人達のことになり、ヒマラヤはフリッツ・シュトイリが相不變で、しかしいまビールにゐる等々のことでした。

スキー客も質は昔と變り貧しくなりましたが、しかしイギリス人の若い青少年達の多いのが目につきました。オランダ、ベルギー人も多いようでした。

翌日は素晴らしい天氣でシャイデックに登りスキーをしました。下の方は石が出ていて餘り面白くはありませんでしたが、ザミと娘夫婦がミュンリヘンに行つた歸りのに一緒に來りました。夕方再び「お母さん」を訪ね、夕陽にかざやくアイガーの下、フィシャーゾンドに向う教會に田口一郎兄のお墓とクリッパのお墓におまいりして、もの凄くこむ電車に乗りました。シャイデックの電車もインターレーケン行きの電車も緑色の新しい「電車」になり、昔の小さい電氣汽關車は影をひそめ、ベルンから二時間でこゝに來られるようになりました。いつ見ても山は美しく、そして私達の第二の故郷グリーンデルワルドを去る時には、胸が一杯になるのです。そして皆がマキ先輩を始め皆様に心から挨拶を送つて、よろしく言つてくれといつてくれます。

(一月七日 バルンにて)



## 圖書紹介

### 勝見 勝著 「山の千一夜」

二十七年一月 双葉社  
三一八頁 寫眞二七葉  
定價 三〇〇圓

ふと、ルームの土曜日の集りでの本を読むことを、引受けてしまった。實は、著者に就て、一向に識らない私は、あまり興味が持てなかつたのだが、急いで、讀した後も、少々索然とした印象である。

そして、曾つて、こんな會話を交した或る人に讀ませたら、きつと、面白がる本だろうと思つた。

—僕は、山の本が好きですよ。  
—まあ、どんな本をお讀みになりますか？

—山の遭難のことを書いた本が、實に面白いと思いますよ。

と語つた、社會人である。即ち、山を識らない人が讀んで、きつと、興味を持つてであらう、山に關係のある本、という印象である。

たしかに「山の千一夜」で、山岳そのものよりも、山岳及び山地に於ける人間と、その仕事や行爲が強く浮き出ている。

一部と二部とに分れ、一部には外國文獻の涉獵より生れた、モンブラン悲史の一章、モンブランの花嫁、山岳寫眞の先驅者、魔の山ナンガ・バルバット、氷河物語、シャミツソオとアルプス、ティンダルの山小屋生活、テップファについて、世界で最も古い岳描寫と山の繪、ゴッホ父子に就て、雪崩の描寫等、十八篇を收め、二部には、自らの體驗より生れた、山の音、風の音、山の好きな夫婦、山と影法師、山とパイプ、山の愛書、憎書、尾瀬の惹く力、正丸峠へ等、廿四篇がある。

一部の外國文獻的話題は、かなり廣く、豊かで、殊に美術方面が精しく述べられている。雪崩を扱つた彫刻のことや、ティンダルの手紙や、シャミツソオの話、その他、物識り的な興味が、相當にある。

たゞ、惜しいのは、その背景に

あるべき山岳の印象が、どうも稀薄であることだ。又、どうしても、山でなければならなかつた魂の消息に就て、もつと突つ込んだものが欲しかつた。且つ、集められた舊稿の載つた雑誌の性格が、さまざまの故か、各篇の對照に甚しい差があり、同材料の重複も、愉快ではない。

とまれ、そうむきにならずに、書名の通り、千一夜の話題として讀めば面白い。

二部の方は、らくらく気軽に書いてあるが、讀んでいて快いのは、筆者の、書くときの、熱と愛とが、より渾然と湧いていているからではないか。

どうも、私の讀後感には、ちと芳しくないが、これは、日本山岳會の會報の爲の記事として、許されたい。

一般の大衆に對し、山を識らない人に山への關心を持たせ、また、山ばかり登つて、一向に本を讀まない近頃の若い實踐家達に、山の本へ親しむ機縁を與え、ひいては、山と文化という面への、廣い視野を持たせる縁口としては、手頃な書であらう、と思う。

なお挿入の寫眞は、なかなか優秀で、印刷もよく、たのしめる。  
(村井米子)

### タイムズ特集 『エヴェレスト偵察』

一九五一年秋に行われた英國のエヴェレスト偵察については、タイムズの記事が朝日紙上に連載されたので、われわれもいち早くその概要を知り得たが、最近在英の島田評議員が、十二月發行の『エヴェレスト・一九五一年の偵察遠征』と題する特集號を會の圖書室へ寄贈された。タブロイド版一六頁、豊富な寫眞とスケッチ・マップを挿入し、記事は隊長シブトンの手記が大部分である。こうした出版が山の専門誌でない新聞の特集にとりあげられる點は、英國全體がエベレストにいかに關心を寄せているかという事實を示すものであらう。尙この遠征の概要は一括して「山岳」次號に田邊主計氏が筆をとられる豫定である。(M)

### 海野治良著 「スキーのABC」

昭和二十六年十二月  
山と溪谷社  
一〇二頁、寫眞一、  
圖版多數 價九十圓

會員海野氏の勞作になるスキーの手引書であるが、もともと發行所の意圖による小冊子であるため著者としても、あらゆる材料やデ

ータを出し盡くして技術論を展開することができにくかつたのではないか、ということを読後第一に感じた。

たとえば、スキー術に於て最も大切でかつ最もむづかしいクリスチャニヤの技術の説明に、全章約一〇〇頁中五頁しかあてゝないことからも、そのような感じがするのである。また、用具の點などでも、近頃スキー場で散見するアンクルバンドの可否論などについて、とくに著者の意見が私に聞きなかつたように思う。著者は決して單なるスキーのテクニシャンやツーリストではなく、積雪期の高峻山岳に重裝備を携へて長期間生活しスキーを走らせた経験者であり、今後まだまだそういう山登りを続けるであらう。そのような場合に、アンクルバンドやその他の新技術を、どうマツチさせたらいいのか知れたがつて、中級程度のスキー経験者はすくなくないであらうし、登山をやつてゐる連中のなかにはかなり多く中級以下の者がいることも著者は知つてゐる筈である。値段が手頃で、スキー場への車中勉強して行くのには大變便利であり、初心者も自己流に陥るまえに、こういう手引書について基礎技術を身につけることは決して無駄ではないであらう。

(NO)

## 會 務 報 告

## 小集會記錄

第一三九回 十二月六日

講演 スキー技術の諸問題

講師 猪谷六合雄氏

第一四〇回 一月十七日

## 懇談會

第一四一回 二月廿一日

## 懇談會

## 役員會

十二月 常務理事會(十二日、十

九日) 役員總會(廿六日)

月例會計報告、會費額變更、支

部運営方針、第七回及第八回國體

問題等審議

一月 常務理事會(十七日、廿三

日)

## 役員總會(廿日)

廿七年度豫算案作成、山岳第四

五年號編集及出刊、第八回國體、

特別會員制考究、月例會計報告

## 國體協議會

第七回國體協議會(一月十七日)

現地側山形縣關係者を交え具體的

協議をした。

## 圖書室基金

昭和廿七年二月廿日現在

一千圓 本間重三、五百圓 堀切

義久、四百圓 府川裕、三百圓

戸塚武彦、二百圓 島羽邦義 北

田正三(敬稱略)

## 小 計

二六〇〇圓

前回繰越残高

九七四圓

残高累計

三五七四圓

## 會報編集費受贈

二千圓 霧ノ旅會

圖書室基金及會報編集費に絶大

な御好意を示された右の各位に深

謝の意を表したい。

## 高山深谷について

本會編集による山岳寫真集「高山深谷」は多數會員の協力によつて優秀な作品が集まり、編集委員會で嚴選の結果、八〇餘點を採用と決定、配列その他の編集一切を了して、出版の契約先である株式會社目黒書店に引渡してあつたのであるが、したがつて遅くも二月末頃には完成をみる豫定であつたところ、不幸にして戦後の不安定な業界の盛衰に、さしも堅實な經營をほこつた目黒書店も店を閉ぢざるを得ない悲境に遭遇し、「高山深谷」の出版はにわかに一頓挫をきたしたのである。

この寫真集は、本會が代々企画編集し會員及同好者に頒けていたもので今回の分は第十一集にあたるのである。目黒書店とのよき提携によつて戦後はじめての「高山深谷」が企画され、會としても大いにその完成に期待したのであつたが、叙上の理由から目下のとこ

ろ發行不能の状態にあることをお知らせすると共に、協力を受けた各位に深くお詫びする。

なお新しい出版者を得て一日も早く上梓を企圖しているが、出版界現下の状況は相當困難な面もあるので、今暫く御猶豫願いたい。

## 編 集 後 記

一六〇號の校正刷をもつて。上越へスキーに出掛けた。せめて車中の暇を利用して編集の時間にあてたいためである。多忙な用務のあい間に、これだけの會報を發行することの困難さをしみじみ感じながら食堂車のテーブルで校正でもやろうと思つて驚いたことは、列車の食堂がなんと場末のキヤバレーさながらの景觀を見せていることであつた。スキーのいでたちをした男女が、酒に酔つて、黒田節、炭坑節の放歌高吟おかまいなのである。どこかのテーブルでやりだすと、車中一齊にこれに和すというありさまでは、呆れかえつて口も利けない。こういう手合いには四等車でもつくつて、押しこめるよりほかに手はないが、いづれにしても大變なスキーヤーがいるのだ。

昭和廿七年三月十日 發行

東京 都千代田區 神田駿河臺四ノ六

發行所 社団法人 日本山岳會

編集者 織内 信彦

電話(自五一一一) 日本體育協會 神田(至五一一一)

振替口座東京四八二九番

印刷所 東京都港区赤坂溜池五番地 株式會社 技報堂

Château Brillant

山頂で 山小屋で  
アルペンの氣分が満喫出来る  
純フランス式高級ブドウ酒

サドヤ醸造場 甲府市 御納戸町  
(現品は山岳會ルームにあります)

傷害保險は是非!!

共榮火災海上へ

社長 宮城孝治

本社 東京都港区芝新橋5の1